

長野県と群馬県境の浅間山(2568m)で今月2日、小規模な噴火があり、現在も断続的に小噴火が繰り返されている。幸い噴火による深刻な被害は出ず、切迫した状況にはないが、2日未明にあった噴火の決定的瞬間の映像は、多くの新聞やテレビを通じてお茶の間に届けられた。その映像を撮影したのは、千葉市にある「まえちゃんねっと」という会社。主にコンピューターソフトの研究や開発などを行う個人事業の会社が、なぜ国内外の報道約30社に映像を提供できたのか。(太田明広)

浅間山噴火、ネット会社が配信

「夜中の3時過ぎあたりから、『映像を提供してもらえないか』と、マスコミ各社から依頼の電話が自宅に殺到した」と話すのは、「まえちゃんねっと」代表の前嶋美紀さん(46)。浅間山火口から北北西に約9キロ離れた群馬県嬬恋村に設置した一眼レフデジタルカメラが噴火の瞬間、火口から赤々と照らし出された火山灰などが噴出する様子を撮影することに成功したからだ。

カメラは知人が所有するマンションの小屋に取り付けられ、千葉市の花見川区にある会社兼自宅から遠隔操作している。噴火前日の1日、浅間山の「噴火

警戒レベル」が2(火口周辺規制)から3(入山規制)に引き上げられたことを受けて、通常の5分間隔から1分間隔の撮影に切り替えた。「前日から何人のプロカメラマンが噴火の瞬間を撮ろうと現地にいたが、『撮影できず、すごく悔しかった』と聞き、少し鼻が高くなかった」と前嶋さんは笑う。

24時間撮影した画像はパソコンに蓄積し、スライド上映のようにコマ撮りした画像を見られるようにしている。映像は同社のインターネットのサイト上で無料で見ることができる。噴火後24時間で約1100万ヒット(検索回数)を記録した。

「まえちゃんねっと」を運営する前嶋さんは代表的な海外メディアのAP通信がこの画像を取り上げた



試行錯誤重ね24時間記録装置

小屋に設置された一眼レフカメラ(左)と動画に適したCCDカメラ。自動撮影で決定的瞬間が撮影された(まえちゃんねっと提供)



浅間山が噴火した瞬間
(まえちゃんねっと提供)

り、カメラが故障したりで試行錯誤を重ねた。今までに約3000万円を費やしたという。

前嶋さんが防災に関心を持ったのは、平成12年の三宅島の噴火のとき。ネット上の掲示板で学者や住民らが防災対応をめぐって活発な議論をしているのに接してからだ。その時、三宅島に設置された東京大学地震研究所のライブカメラが映像を記録保存できないのを知った。「遠くのものを自宅にしながら見ることができることに興味を持った」ことから、システムの開発にのめり込んだ。

東京から近い浅間山に関心を持つようになり、自治体などが設置しているライブカメラの映像のアーカイブ(保存)に着手。16年に浅間山が噴火したとき「行政の映像よりもっと良い画像が撮れる」と思い、自らも撮影を始めた。ただ最初はカメラの焦点設定が昼夜で異なった

普段は、火山活動が活発になったときに熱した溶岩などが噴煙や雲に映って明るく見える「火映現象」の撮影を続けてきた。本業とは関係がないため、マスコミへの映像提供も無料で行っているが、このシステムを事業として展開できる道筋も見えてきた。監視や観測システムとして、国立極地研究所のオーロラ観測や動物園での幼鳥の観察などに使われ始めている。

「ライブ映像など生の情報を提供するが、実際に役立つには事前に防災に関する知識を学んでいることも重要だ」と話す前嶋さん。過去の映像を見て今後の対応に生かし、「どのようにしたらいいかを、みんなが考えてくれれば」と期待する。